

熊本

人物

水路

神風連の人びと



林校園

根元・純化・酩酊

光岡 明著

(熊本近代文学館館長)

私は歴史家ではありません。ただ、われわれ熊本人の先人が歩いた道を、私なりにたどるエッセイとしてお読み下さるようお願いいたします。私的エッセイとはいえ、お読みになったみなさんは、同感したり反発したりなさるでしょう。その同感や反発の原因を自分のなかに探ることが、熊本の歴史と伝統にふれることになると思います。

私はまず、明治九年十月に起こった神風連の変について語ろうと思います。

少しでも熊本の歴史に興味をお持ちのみなさんには、いままら説明することもないわけですが、神風連の変は当時敬神党と呼ばれたグループ約百七十人が、明治新政府の文明開化の方針

に反対して決起し、熊本城内にあった陸軍の熊本鎮台や、いまの県知事にあたる県令の自宅などを襲った事件で、変はその夜のうちに鎮圧され、決起者の大半が戦死、または自決いたしました。

明治新政府は明治二年版籍奉還、同四年廃藩置県を断行します。それまでの藩がなくなると、いまのような県ができたのです。封建制が一挙に否定されました。明治維新はまさに革命でした。封建制度を支えた身分制度はなくなり、国民平等の建前をとりましたが、革命の苦しみも国民を平等に襲いました。なかでももっとも不平だったのが、明治維新の中心となってきた武士階級、士族たちでした。なにしろ、一夜にし



原道館跡(熊本市千葉城町)



桜山神社内神風連の墓

て失職です。

明治の初期にはこの不平士族たちによる反乱が、日本各地でたくさん起こります。その最大のものが、明治十年の西南の役です。神風連の変もこの不平士族の反乱の一つ、とよくいわれます。そういう面ももちろんありますが、少し調べてみると明らかにほかの反乱と違った部分があります。この違いはわれわれ熊本人の先学である池辺三山、徳富蘇峰らによつて、はやく指摘されていることですが、三山は「幽秘極まるること」といい、蘇峰は「保守的清教徒」とか「神秘的秘密結社」といつています。

つまり、神風連にはきわめて強い神秘性、宗教性があるということです。明治新政府の政策に反対する政治的な行動という以上に、日本に古来の神道にもとづく神ながらの道を復活させようという思想的、宗教的な人びともあったのです。

明治維新を動かした考え方は「尊王攘夷」でした。外敵を打ち払い、王、この場合は天皇です、を尊ぶという朱子学の大義名分論なのですが、明治新政府は「尊王」はともかく「攘夷」ははやばやと捨て「開国」、それまでの鎖国の方針を諸外国と通商する「開国」に切り変えます。なにしろ、革命の大方針が変わったのですから、大混乱が起こります。

明治新政府してみると、西洋の文物に日本が大刀うちできるものでないことがよくわかっています。開国して、西洋文明のいいところを取り、悪いところを捨てる「採長補短」あるいは「和魂洋才」の方向を進んだのです。こういう面でも、士族たちの間に不平不満が渦まきました。その通商も関税も自分たちで決められない不平等条約だったのでさらさらです。

神風連はこれらの政治的な解決を求めただけでなく、日本はどういう国でなければならぬか、ということに世に問うたのです。

それは神風連の師であった林校園の考え方や

行動によく現われています。校園は原道館という学塾を建て、多くの子弟を教えました。校園は博学の人だったといえます。古今東西の書籍、範圍も古典から兵書、科学書、蘭書にわたったそうです。しかし、中心は本居宣長の国学でした。その上で、現状是認ともいうべき宣長学に、古神道の現代復活を「宇気比(うけひ)」という実践でつけ加えたのです。校園には残された著作は、そう多くありません。わからないことが多いのですが、「古代神政のユートピア」(熊本在住評論家・渡辺京二氏)のようなものを求めているのは確かです。

神風連について、頑迷固陋とか時代錯誤とかいう見方があります。明治維新というもつとも政治的な季節、近代国家への再生という時期に、一種の宗教国家を作ろうというのですから、そういう見方もできるでしょう。

しかし、自分の学問、思想の根元にさかのぼり、その考え方を純化し、自分を酔わせながら(それが決起の意味です)世に問うていく資質は、みなさんにもどこかあるのではありませんか。校園や神風連は当時でも「迂腐」とか「変わり者」とかいわれていたそうです。その行動はいまの目で眺めれば、愚直としかいいようがありません。しかし、現代の平面的、均一的、単純で、どこかおろかしい状況のなかで、このような愚直な考え方や、行動が見直されてもいいのだ、と思います。



桜山神社内の誠忠の碑(熊本市黒髪5丁目)



熊本城内軍旗染血の跡(熊本城二の丸)